

ニセフォール・ニエプスの写真術 ―再現実験と言説分析― (3)

大阪芸術大学 文芸学科 教授 青山勝

本研究は、2023（令和 5）年度に開始したニセフォール・ニエプス（Nicéphore Niépce, 1765-1833）の写真術に焦点を絞ってその発展過程の全貌を総合的に解明することをめざす研究課題「ニセフォール・ニエプスの写真術―再現実験と言説分析」の3年目に該当するものである。本年度は主に、(1) フィゾトタイプ研究、(2) フランスにあるニエプス関連のミュージアム等の視察・調査、(3) 研究成果の公表（出版）にむけての準備の3点を軸として研究活動を進めた。以下に、その概要を記す。

(1) フィゾトタイプ研究

2024（令和 6）年度に進めた「フィゾトタイプ」に関する文献史料の検討やその再現実験を踏まえて、今年度はより包括的に、1820年代後半に始まるニエプスとダゲール（Daguerre, 1787-1851）の交流関係の複雑な諸相に光を当てようとした。

具体的には、一方で①ニエプスがダゲールと写真術に関する共同研究をはじめた 1830 年から、ニエプスが亡くなる 1833 年までの数年間に 2 人のあいだで交わされた手紙等の史料を精査し、〈フィゾトタイプ〉の開発の経緯とその製法の詳細を文献的に精緻に辿り直した。他方で②その製法の再現実験を繰り返し行い、その製法の詳細を実践的にも検証した。

その成果は、「ニセフォール・ニエプスのフィゾトタイプ ―その開発の経緯と製法の詳細」としてまとめ、本学大学院紀要『藝術文化研究』（第 30 号、2026 年 2 月）に投稿し、掲載された。

フィゾトタイプ研究には、なおいくつかの課題が残るものの、カメラを用いた撮影に関して一定の成果を得られた点は今後の研究に繋がる大きな成果であり、今後、さらに研究を深めつつ、ニエプスの晩年の活動をより立体的かつ精密に描き出すことを目指していきたい。

(2) ミュージアム等の視察・調査

2025 年 8 月末から 9 月上旬にかけて、以下のミュージアム等を視察し、ニエプス関連の写真作品や史料を中心に調査（熟覧等）を行った。以下が主な訪問日と訪問先である。

8 月 30 日（土）

シャロン＝シュル＝ソーヌの郊外のサントル運河等

8 月 31 日（日）

メゾン・ニセフォール・ニエプス

9 月 1 日（月）—2 日（火）

ミュゼ・ニセフォール・ニエプス

9 月 3 日（水）

パリ工芸博物館（アール・ゼ・メティエ）

9 月 4 日（木）

フランス写真協会、フランス国立図書館

9 月 5 日（金）

フランス国立工芸院の収蔵庫（サン＝ドニ）

9 月 6 日（土）

貨幣博物館、郵便博物館

9 月 7 日（日）

ルーブル美術館

以上のうち、特にミュゼ・ニエプス所蔵の自筆の手紙やエリオグラフィ関連の作品資料、フランス国立図書館所蔵の《馬とその御者》をはじめとする資料、フランス国立工芸院のサン＝ドニ収蔵庫のダゲールのダゲレオタイプ作品等を熟覧できたことは、今回の視察・調査旅行のきわめて大きな成果である。

(3) 研究成果の公表（出版）にむけての準備

これまでの研究成果を 2027 年、すなわち、ニエプスの《（無題の）「眺め」》撮影後 200 年という記念すべき年に書籍（編著）のかたちで発表することを計画しており、今年度はその準備も具体的に始めた。

出版社である赤々舎とも相談しつつ、企画の概要を固めた。収録予定のジャン＝ルイ・マリニエの論文（フランス学士院での講演原稿）については、翻訳権を獲得し、すでに翻訳もほぼ完了している。それ以外にも、エッセイ執筆者を決定し、執筆依頼を行い、さらにニエプスの手紙等の史料のうち特に重要なものを選定し、その翻訳にも着手している。

こうした成果を土台にしつつ、次年度は、各種写真製法の再現実験の精度を高めつつ、出版にむけて翻訳や原稿執筆の作業を計画的かつ着実に進めていく予定である。